

2021年度 国際日本文化研究センター共同研究会

<共同研究の目的>

国際日本文化研究センターが最も力を入れているのは、共同研究方式の日本文化研究です。日本文化を研究するためには、関係する個別専門分野ごとの成果が着実に積み重ねられなければなりません。と同時に、専門分野の枠組を越えて、研究者が相互に知見を高めあう場が必要になります。こうした共同研究の場は、総体として日本文化理解の促進に大きな役割を果たすものと考えます。このような観点から学際的な共同研究にウエイトを置いています。

また、日文研の共同研究では、日本と異なる知的伝統にたつ海外の研究者との交流をも重視します。異文化からの視点は研究に新しい展望と成果を与え、また研究のあり方に、よい意味での相対比をもたらします。さらに、国際化の時代を迎えた今日、日本文化研究もまた国際化をはかることで、時代の要請に応えることができるでしょう。

もちろん、日文研の共同研究は、単なる研究成果の交換にとどまるものではありません。専門分野及び知的伝統を異にする研究者たちが研究過程を共有しあうことによって生みだされる創造性、これこそが、日文研の共同研究がめざすところの眼目なのです。

(※奨学生はオブザーバーでの参加となります)

近代東アジア文化史の再構築 I —19 世紀の百年間を中心に

<研究概要>

従来、19 世紀以降のナショナリズムの影響のもとで、われわれのいわゆる文学史や文化史、いずれも一国を単位とし、外部、ないしは他者と切り離して構築してきた。日本文学史・文化史、中国文学史・文化史などがそれである。しかし、これは、文学や文化自身の成立原理に反するのみならず、真の歴史の実情とも異なっている。

周知のとおり、日、中、韓、越の東アジア四ヶ国の文学や文化は、古代、近代を問わず、つねに互いに影響し、互いに交錯して、緊密に連動している。古代では、漢字や漢文、また儒教や仏教などがその基盤を構成し、そして近代では、いわゆる西力東漸、西学東漸という時代の流れの中で、東アジア四ヶ国は、さらに交互に経験を参照し、交互に支え合う形でそれぞれの文化的転換を模索しつつ、一つの全体のもとで、相次ぎ西洋文化、西洋文明のインパクトを受け入れてきた。したがって、この 200 年の東アジアの文学や文化の生成と発展からすれば、それを安易に各国の一国内史に切り分けては、けっしてその間の真の歴史過程を再現することができない。

このような事情に基づき、本共同研究会では、近代日中の文学、文化交流を中心に、その相互に影響し、交錯するさまざまな歴史的事例の発掘と考察を通して、従来の一国史的な歴史叙述の脱構築ないしは止揚を目指すべく、既成の歴史記述とは異なる視点や方法を提示し、当該地域全体の文学や文化の歴史をあらためて構築してみたい。

<研究代表者>

劉 建輝 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

5 回

文明としてのスポーツ／文化としてのスポーツ

<研究概要>

スポーツには国や地域独自の文化を背景に発展・進化を遂げてしていったもの、そして他国・他地域との接触によりもたらされたもの、があると考えられる。幕末の開国以降西洋列強との接触により日本へ伝播した西洋起源のスポーツの背景には、ボクシングのようにルール設定により野蛮との訣別を図った、すなわち文明の一要素となることを企図したものがあつた。また、日本で生まれたスポーツにも柔道から JUDO への展開---あるいは進化---のように異文化との接触により変貌を遂げていった類もある。一方には野蛮と対置される文明としてのスポーツ、そして他方には一国のなかで文化として展開したのち異種文化と遭遇しそれを契機に変化していった---あるいは変化を生まなかった、拒んだ---スポーツ、を考えることができよう。本共同研究は、この2種のスポーツを念頭におきながら近代日本の歴史のうえでのスポーツに関わるさまざまな事例を検討し、日本文化の従前の解釈に新たな視角を提示することをも目指すこととしたい。

<研究代表者>

牛村 圭 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

4回

比較のなかの「東アジア」の「近世」

—新しい世界史の認識と構想のために—

<研究概要>

研究史上、従来からも様々な議論があった東アジアの「近世」（ないしは、初期近代、前近代）と呼ばれる時代について、まずはどのような時代区分において考えるべきか？ 次いで、中国、日本、朝鮮・韓国、琉球、ヴェトナムなどの諸地域において、如何なる共通性と普遍性、同時に差異や個別性、特殊性が存するのか？ また、各々の国や地域における「近世」の内実の相違が、通常、近代以降の異なった進み行きに対して、相応の影響を与えたと考えられるが、必ずしも「近代」や「革命」に至るプロセスとしてのみ評価するのではなく、独自の時代である「近世」の特質を検証し、その豊饒さを再評価することを試みたい。その際には、可能な限り、他の地域や文明圏との比較をも念頭に置いて、世界史的な同時代性についても考えてみたい。こうした検討や考察を通じて、延いては、西洋中心史観とは異なる、在るべき新しい世界史認識を摸索しつつ、構想することを目指したい。

<研究代表者>

伊東 貴之 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

3回

国際的文化発信のなかの日本像 ―柳澤健の学際的研究―

<研究概要>

柳澤健という人がいた。詩人にして外交官だった。戦前に文化外交を唱道し、今日の国際交流基金の前身である国際文化振興会の創設にかかわった。フランス通で、その文化芸術についての評論を著し、藤田嗣治の創作を支援した。日本ペンクラブの設立にもたずさわった彼は、芸術家・文化人との幅広い交遊を誇っていた。日文研には、柳澤の多彩な交流と活動の足跡をうかがわせる『柳澤健関係文書』が所蔵されている。そこに残された資料を活用し、あわせて彼が残した多方面にわたる著作を読み解きながら、この特異な人物の事績を学際的に究明し、戦前戦中という困難な時代に彼が伝えようとした文化とは、そして日本とは何だったのかを考察する。

<研究代表者>

芝崎 厚士 国際日本文化研究センター客員教授
楠 綾子 国際日本文化研究センター准教授

<本年度研究会開催予定>

4回

植民地帝国日本とグローバルな知の連環

<研究概要>

本研究「植民地帝国日本とグローバルな知の連環」は、近代日本において本国と植民地・勢力圏（台湾・朝鮮・満洲など）で形成された帝国の「知」をグローバルな文脈から捉えることを試みるものである。日本本国―植民地という二項だけではなく、日本人と被植民地人のいずれにとっても近代的な「知」の淵源となっていた西欧から流入した「知」の影響を分析対象に加えながら、帝国日本において形成された「知」を考察する。従来別個に進められてきた分野の研究者を集め学際的な議論を通じて、1) 複線的な西欧世界―日本帝国（植民地）の関係、2) 学習の対象としての西欧と反面教師としての西欧、3) 研究者の「知」と植民地権力の統治の「知」の関係、4) 被支配者にとっての西欧の「知」の4つの課題を検討する。本研究には、韓国・台湾を中心に海外の研究者を研究分担者に加え、国際色豊かな研究組織とし、最終年度に国際シンポジウムを開催する計画である。

<研究代表者>

松田 利彦 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

4回

日文研所蔵井上哲次郎関係書簡の研究——国民国家の始発と終焉

<研究概要>

井上哲次郎（1856～1944）は明治期の東京帝国大学を代表する哲学者であった。日文研にはその書簡が140点所蔵されている。本共同研究会では、その書簡の体系的な分析をもとに、日本における国民国家の始まりの姿がどのようなものであったのかを考察する。作業としては、1)井上を中心とする知識人のネットワーク分析、2)国民国家における全体主義と民主主義の関係の考察、3)国民国家における人権と主権の関係の考察を三つの柱として行う。

それらの作業を通して、1)井上が作った知識人のネットワークにおいて、国民国家がどのように構想されたのか、2)そこにおいて民主主義と全体主義はどのように区別されていたのか、あるいはいなかったのか、3)そこでは人権および主権がどのように関係付けられ、国民国家を支えるものとして構想されていたのかを明らかにする。

その結果として、国民国家や民主主義が形骸化する現代の日本社会のあり方を浮き彫りにしたいと考えている。

<研究代表者>

磯前 順一 国際日本文化研究センター教授
蒯田 真司 国際日本文化研究センター客員教授

<本年度研究会開催予定>

3回

ソリッドな〈無常〉／フラジイルな〈無常〉－古典の変相と未来観

<研究概要>

この共同研究は、古典・無常・未来観という三つのキーワードの中で、国際的・学際的視点において日本文化の再考を行おうという試みであり、日本古典研究の国際的展開を志向し、その方法論を探求するコンテキストから、新たな世界観の開発を目途とする研究提案である。

チャレンジングな志向に載せた研究テーマは、日本文化の偏差を「ソリッド (solid) / フラジイル (fragile)」という対立概念の中に相対化し、〈グローバル〉な〈アジア〉という拡がりの中で、「無常」に象徴される日本的な古典世界の変容と未来を通史的に広く問い直し、国際的パースペクティブの中に定位することを目指そうとの謂いである。

2016年より4年間推進した「投企する古典性－視覚／大衆／現代」という共同研究と、その成果物である論集『古典の未来学－Projecting Classicism』の問題意識を批判的に継承し、未来観としての〈無常〉を問い、日本古典研究の再構築を継続したい。

<研究代表者>

荒木 浩 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

4回

縮小社会の文化創造：個・ネットワーク・資本・制度の観点から

<研究概要>

日本の人口は 2008 年から急速な減少に転じた。高齢化率が高くなり、家計の可処分所得は 2015 年には 30 年前の水準に戻り、豊かさを感じていない国民が増えているといわれている。そうしたなかで、富裕と貧困、東京と地方、本土と沖縄、「日本人」とそれ以外、高齢者と若者、健常者と障害者、性的多数者と少数者、グローバル・エリートとローカルな民など、社会のさまざまな分断があらわれている。

そのような時代に、文化はどのようなものになるのだろうか。現代の日本で新たな思想や価値につながる何か芽生えているのか。制度や社会的な圧力によって生まれなかったものがありはしないか。社会福祉や地域振興と文化創造は、ときに矛盾をはらみながら展開するが、はたしてそれらは個の「生」とどう関わっているのか。

個人の「生」の表現とそれに関する制度、政策、規制、資本主義の関係、参照点としての異文化圏、そして理論と批評の行方についてなどを検討することを通して、縮小社会における文化創造の現状認識を可視化したい。

<研究代表者>

山田 奨治 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

5 回

戦後日本の傷跡

<研究概要>

本共同研究では戦後日本を〈傷跡〉というキーワードから再検討する。傷跡とは過ぎ去った過去の時間に生じた出来事（傷）を再確認するための記号であるばかりではない。それはいまだ終わらない、完結しない過去、癒やしがたく忘却することのできない経験が現在に息づく、現在進行形の語りによってしか語ることの出来ない、過去の時間と現在の時間の交錯する場所だ。傷跡はまだ固まる前のかさぶたのように、現在の暴力によって剥がされ、剥き出しになり、新たな傷として再生することもあるだろう。戦後日本をそのように無数の傷跡が無数の新たな傷として更新されてしまう時空間として捉えることが出来ないだろうか。文学や芸術において表象された傷跡、様々な民衆運動の闘いとその挫折の中に見られる傷跡、医療や健康政策の中で管理される身体と個人の生死など、戦争経験の傷跡を生き続けなければならなかったアジアと日本の戦後社会の多様な問題について議論する。

<研究代表者>

坪井 秀人 国際日本文化研究センター教授
宇野田 尚哉 国際日本文化研究センター共同研究員

<本年度研究会開催予定>

4回

貴族とは何か、武士とは何か

<研究概要>

日本は中国や朝鮮諸国とは異なり、武家政権が現われ、七百年近くも存続した。このことの持つ意味は、単に日本の前近代史の分野だけに留まるものではない。

まずは中近世の「武士」の貴族的要素、武家と貴族との融合について、日本中世史・近世史研究の立場から、実証的に考察していく。そして、何故に日本において武士が発生し、それが政治・経済・社会、そして文化の局面において重要な存在となり、そして貴族政権に組み込まれ、さらには政権を担う存在となったかという問題について、古代史・中世史の視点から解明する。

暴力団的性格や穢としての存在、また貴族志向の強さ、芸術的側面などを持った武士が、歴史の重要な構成要素となる分岐点がどこにあるのか、そしてそれはどのような契機や過程によるものなのか、それは日本という国を理解するための最重要な課題なのである。

さらにアジア史の中の日本歴史の普遍性と特殊性について、国際的に解明する。

<研究代表者>

倉本 一宏 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

4回

東アジアの Multidisciplinary Science としての本草学の再構成 —実物検証を伴う文理融合研究の新展開

< 研究概要 >

昨今、専門性への行き過ぎた集中への反省から、「Multidisciplinary (学際的)」な研究が大いに求められています。それを進めるお手本として、本研究会では嘗て東アジアで花開いた「本草学」に着目します。なぜなら“本草学者”たちの研究成果や生きざまは、Multidisciplinary な性質を多分に有しているからです。また本草学は herbalism (植物学に近い) と訳されてきましたが “Multidisciplinary Science” と訳するに相応しい学問であると考えています。それは平賀源内、木村兼葭堂、南方熊楠などを見れば明らかです。本研究会では、医薬学からアートに渡る広い分野でのプロジェクトを実施し、“現代の『本草学』” 構築を目指します。特に実物検証や社会生態学的な観点からの研究を重要視し、多分野のエキスパート達と共に次世代の学問体系を創る『新たな化学反応』を発信していきます。

< 研究代表者 >

伊藤 謙 国際日本文化研究センター客員准教授
磯田 道史 国際日本文化研究センター准教授

< 本年度研究会開催予定 >

4 回